
ハートに火をつけて

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートに火をつけて

【Nコード】

N2084Y

【作者名】

千葉

【あらすじ】

将来の夢は何ですか？

もう随分長いこと無氣力が持続している。何をしていても、一体それが今後どのような利益を生むのか、果たしてこれは徒労に終らず済むのだろうかというようなことばかり考えている。例えば乏しい時間の隙間を縫って書き貯めてきた、しかし誰からも評価されずにいる数百枚の原稿用紙が、自分の人生に疲労と諦念以外の何を与えたのか？そしてこれからもそうして時間と力を使い続けたとして、いつの日かそれが報われる日は来るのか？そう考えだすと何もかもが無駄な気がした。全ての創作活動はただの自己満足、世間には塵ほどの影響も及ばさない。

たくさんの才能と出会ううちに、自身の内にあった自信は肅々とそのなりを潜めていった。自分は何かを生み出し、且つ他の人々にそれを認めさせることが出来るような選ばれた人間ではないのだ、という確信ばかりが日ごとに強くなり、いつしかまともに将来を考えることを止めてしまっていた。真暗なわけではないが、美しい光に満たされているわけでもなく、急な起伏があるわけではないが、ただ平坦なだけでもない。その他大勢の前に開かれているのと同じような道を、選択するしか術が無い。

いつだって自分より上手くこなす人が居る。そういう人たちに、自分はどう努力をしたところで勝つことは出来ない。だとすれば、自分がそれを行う必要は無い。いつか知人にそう打ち明けたところ、「まだ若いのに何をそんなに諦めているのか」と呆れた顔をされた。確かに年齢的にはまだ若者の域を出ないひよっこであるかも知れない。しかしそうした実際の年齢がどうあれ、少なくとも自分はもう自分のことを若いとは思っていない。寿命とか、そういう話をした

いのではない。これは精神的な問題だ。

時刻は17時になろうとしている。図書館の中は人もまばらになり、閑散としていた。誰かの足音や、鼻を吸る音や、書物の頁を捲る音がやけに大きく響く。普段は気にも留めないものが、この空間ではその存在の大きさを歪められたようだった。紙パックの中に残っていた飲料を、ストローを咥え一息に吸い上げる。じゅるじゅると液体が筒の中をせり上がる音も異様な音量で空間に響いた。この階は飲食を禁止されているが、咎めてくる者は誰も居ない。

読みさしの文庫本を投げだして、大きく伸びをした。今日も誰かの作り上げたものに感心するばかりで、一つも自分の言葉など生み出せなかった。そろそろこの無駄な足掻きとも、完全に縁を切った方が良いでしょう。何度かそう思ってきたが、妙な焦燥が邪魔していた。まだ何か、途方もない何かが自分の中に眠っているのではないか。そう期待する気持が、まだ根強く残っているのだ。やはり自分のことは可愛いものだ、なかなか見切りをつけることが出来ない。まだ大丈夫、やれば出来る、と甘やかしてやりたくなる気持が諦念と同居しているのだ。

机の上には二冊の文庫本が放り出してあった。糧にしてやろうと先程書棚から持ち出してきたものだ。どちらとも名の売れた作家だったが、別に深い理由も無く今まで通って来なかった。読みかけていたのとは別の方を手に取り、何とはなしにばらばらと頁を捲る。粗筋も知らない物語の綴られた紙を眺め、何の情報も得ることのないまま最終頁に到達した。文芸評論家の解説が添えられている。聞いたことも無いその人物の名前をしばらく眺めた後、再び頁を捲って本編に戻った。適当に指の触れた頁を開く。87頁。その数字の横に書かれたサブタイトルの字面に、何故だか頭の奥が強く反応した。一瞬、自分を取り巻く周囲の温度が下がったような気がした。17時のチャイムが鳴っている。今日は夜間開放日なので、図書館は21時まで開いている。鞆の中に手をつ込み、くしゃくしゃになったルーズリーフの束を引っ張り出した。向こうの席で誰かが携

携帯電話で通話をしている。小声で喋っているが、室内の静けさは強大なものだったし、何しろここでは音は存在を歪められているのだ、少し耳を澄ませば会話の内容を聞き取れてしまう。今日の夕飯は外で食べるそうだ。無論飲食と同様、図書館内では携帯電話での通話は禁止である。

しかしその小さな話し声も、猛烈なスピードで黒鉛を滑らせる音で掻き消されていた。粗筋も知らぬ物語の小編に冠された言葉の一つが、甚大なインスピレーションを誕生させていた。

やれば出来る、どこか遠くの方で誰かが励ます声を聞いたようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084y/>

ハートに火をつけて

2011年11月4日08時30分発行